

第14回 JIA関西建築家新人賞 審査講評

審査員長／魚谷繁礼

「源光寺庫裏」奥野八十八

書類審査の際には、その建築の魅力が理解しきれないまま、リビング空間の吹き抜けの壁における大壁の漆喰と真壁の土壁の取り合いが気になり現地審査に臨んだ。その現地審査では、設計者の少し拙い説明を聞きながら、この建築の構成の強さをじわじわと実感する羽目になった。

本堂と庫裏のうちの主に庫裏部分の改修である。寺院の庫裏には住職の住居というプライベートな生活空間の内に、檀家さんらの立ち入るコモンスペースが入り混じっているが、今回の改修によりプライベートなスペースと本堂の間にコモンスペースを自律させるべくプランが再構成された。そのようなプランニングは、新たに穿たれた開口や減築により生み出された庭により創出された軸性と整理されたゾーニングおよび動線により実現されている。

そして以上のような、これまでに繰り返された増改築により複雑化した全体を整理するような操作に加えて、今回の改修では細部においてはその複雑さがより増すような操作も行われており、よってこの建築は明快な構成と複雑な奥行を併せ持つに至っている。

ゾーニングと動線という計画学的手法に加えて、軸性という古典的ともいえる手法を加えることで諸所の空間は豊かな拡がりをもち、そして直接は設計していない本堂や門をも計画に取り込んだ。既存空間を再構成して住職家族のプライベートな生活空間を確保することで、今後も地域にひらかれた現代的な意味での寺院の役割を担うことを可能にしえただろうこの庫裏は、関西建築家新人賞に相応しいと考える。

「オセロハウス」中西正佳

あたかもそれぞれの敷地の境界を主張するような塀やフェンスに囲われた住宅の建ち並ぶ住宅街において、塀やフェンスを設けずに敷地より少しコンパクトに設置された1階の上部に、ほとんど敷地いっぱい広がった2階を重ねたこの住宅は、特別な素材や形態を持ち合わせていないにも関わらず、住宅街においてちょっとした異彩を放っていた。外壁の素材がそのままに内部化された1階は、天井高さも抑えられ、まるで洞窟のように東西に抜ける。階段を2階に上がると、天井高も高く広々とした空間があり、1階からは45度振られた南西への眺望が眼前で水平に広がる。その気積の大きな大らかな空間のそこそこに居心地よさそうな多様な居場所が設えられていた。2階中央の象徴的な柱の柱頭で2つの昇り梁を受ける納まりや、梁のせいを統一しつつ軒先に向けて梁と梁の間隔が狭まっていく寸法間隔、2階の階段廻りの落下防止や空調に対する配慮の仕方からフローリングの張り方向に至るまで、随所に納まりや寸法に対する細やかで適切かつ統一された判断が反映されているからこそその空間であろう。

新人賞応募作にも関わらず、熟練した住宅作家によるものかのように巧みに検討され、意匠性や機能性、構造から環境性能まで高度に統合されたこの住宅は、関西建築家新人賞に十二分に相応しいと考える。将来の隣家との接続後の住まい方もまたたのしみである。

特に現地審査にあたっては、候補の建築家の皆様とその施主の皆様のご理解ご協力により、それぞれに魅力的溢れる建築を存分に堪能することができ、心より感謝申し上げます。

偶然ですが、受賞の2作品はともに、今後の更なる改修を想定しているのが印象的でした。今回受賞されたお二方が、これを励みに一層精進され今後つくられていく建築により、この社会が今より豊かなものになっていくことを期待しています。

審査員／青井哲人

受賞者のおふたりには心からお祝いの言葉を贈りたいと思います。おめでとうございます。また現地審査にご協力いただいたすべての設計者・建主他の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

7作品の現地審査では、いずれも書類では決して見えていなかった豊富な発見が得られました。極力作品そのものを丁寧に読み解き、そこから「建築家」としての構えを考えていくような審査を心がけました。7作品すべてについて評価の要点を文章化して選考に臨みましたが、私がとくに強く考えさせられた作品と建築家像について少し字数を費やしたいと考え、ここでは3作品に絞って書くことにさせていただきます。

奥野八十八《源光寺庫裏》

求心的に完結する本堂に対し、増改築の履歴が堆積して境内片側を埋め尽くした庫裏部分を鮮やかに再構成した総合力ある作品である。平面的にも断面的にも、論理的かつ効果的にヴォイドをつくることで、採光と通風、動線と視線の交差をつくり出せるような屋内／屋外（図と地）のレイアウトが得られている。高密度に建物と生活が詰まった既存環境から西澤文隆の「正面のない家」を思わせる庭の構成を見出した感じだ。こうして境内全体は、大づかみに言えば求心性と離散性とが接合され併存する状態になる。そこに公私の境界面、家族共同体の象徴性、歴史的痕跡を浮遊させる謎めいたユーモアなどを多層的・重層的に配し、檀家社会と家族生活が今日的に再調整される。そうした読み取りがじわじわとゆっくり感得されてゆくような現地審査を終え、同夜あらためて考えたのは、奥野の物言わぬ手付きのなかに、伝統建築、近代建築、その批判、近年のリノベーションなどを経て歴史的に蓄積された建築家の集合的知見を、いわばアーカイブとみなし、新しい複雑な社会的主題に向かってフ

ラットに取捨し投入できる感覚であった。イデオロギー的にも趣味的にも序列なく過去の成果を扱えるそのセンスは、じつはきわめて現代的なものではないか。

中西正佳《オセロハウス》

書類審査では分からなかった高いクオリティが、現地審査ではあらゆるレベルで感じられた。たとえばグランドレベルに緩やかなマウンド状のアースワークがさりげなくつくられ、その起伏に追従させた搔き落としの外壁が何ともユーモラスで心を惹かれた。この壁を連続させながら外部とは違う配慮によって仕上げを微妙に差異化した内壁も良い。階段をのぼり切って振り返ったとき、内部から外部へと広がっていく圧倒的なリビングスペースには、1950～60年代のモダン・リビングの文法が躊躇なく駆使されているが、大屋根を支持する構造も、機能的な配慮もすべてが野蛮性、象徴性、諧謔の類いへとつながって魅力を放つ。こうした多彩な感覚を盛り込みながら、しっかりとした品位を保って全体をまとめあげた中西の力量には感服させられる。もちろん、階上・階下の機能的・空間的な性格を反転させ、隣家と接続して家族的な関係を再生していこうとする社会的・空間的な構想もおもしろい。ただ、その構想を支える設計の軸が、家族内部に閉じているのは否めず、たとえば街路側をフォーカスすれば随分違ったであろう。とはいえ、設計チームによる提案および実現性の検証、そしてあの野蛮な品位というべき修辞学的クオリティこそが、施主の展望を変える力を発揮したであろうことも想像しえた。これから次々に現れてくる新しい拡張的な家族像への、建築家としての意欲と感性を高く評価したい。

湯川晃平《しらさぎ子ども図書館・詩の森》

第一に、社会的に有意義なプログラムを施主とともに練っていくプレデザイン面での湯川の貢献を評価したい。第二に、単純だが発明的な断面形状と平面構成によって、住宅地の風景とこの施設とを縫い合わせる二重のコンテキストを鮮やかに作り出しているのも湯川の優れた幾何学的センスを物語る。だが、ここでは次のことを率直に書き留めたい。つまり実際に訪れてみたこの施設は、自治体が運営するニュートラルな性格の公共施設を小さくしたもの、という感覚を否めなかった。本当に必要なのは、行政サービスにはない独自の私的理念ではないか。それを解像度高く引き出しつつ引き受けるような具体性の思想が建築家として求められたのではないか。いま現に子供たちの人気を集めているこの施設の空間は、たしかにおおらかで心地よく、素晴らしい。それはプレ・デザインから施設の具現化までのすべてに一貫する湯川の良心と技術力をうかがわせ、いかにも好ましい。しかしながら同時に、普段居場所をもたない子供がいられるような、多彩な性格をもつ親密な場所がより繊細につくり出されてもよかったのではないかという思いもまた拭えなかった。口幅ったくなるのは本意ではないが、この建物を長い目で育て、物理的にも手を加え続けていくことが湯川のライフワークになるのではないかと夢想する。

審査員／前田茂樹

「源光寺庫裏」 奥野八十八

庫裏と源光寺との来歴を深く調査により掘り下げながら、クライアントであるご家族の暮らしに合わせて生活の場に自然光をもたらす中庭を設け、座敷・前室・法衣収納の部屋の機能を整理していく過程は、近代的であり統合的である。と同時にこの建築を魅力的にしているのは、既存の状態を活かしつつ、部屋ごとにプロポーションも、仕上げも様々な状態が混じう「ブリコラージュ」がつくる居場所の質であろうと感じた。統合をすると洗練に向かい緊張した場ができ、他者性が入る「ブリコラージュ」では弛緩した場が出来がちである。本作品では、この永く源光寺を支えてきた庫裏を、この時点での生活に合わせてアップデートをした履歴を残すための「ブリコラージュ」と一貫して捉えている。また次の世代の設計者がその履歴を見て、表層の仕上げを外して別の仕上げに変えうることで、庫裏と源光寺との来歴をまた次世代に継承することになる。現地審査で体験した立体迷路のような内部空間を構成し、同時に今後の更新の余地を残す設計手法は、今後の建築界に大きな貢献が期待でき、建築に対する姿勢を含め関西建築家新人賞に大いに値すると考える。

「オセロハウス」 中西 正佳

2 階のリビングは広場のような空間だった。いろんな居方ができる場所をつくるために、建築を構成する要素や環境の取り込みを行い、寸法や、素材の質感だけではなく、構造設計、家具、建具、空気の流れや温熱環境、可変し得るものを統合していく力量が感じられた。統合だけでは洗練に向かうが、ここでは建築の一つ一つの要素をより、生活や人の原始的な感覚に近づけている。例えば木構造の接合部で出てくる金物をすべて木栓で埋めていることなどにより、屋根が有機的な存在として広場のような空間の質に寄与している。

また、1 階と外部空間に言及すると、1 階に寝室を設け窓が少ないことは、周囲に対して閉じた印象を持たれがちであるが、外壁のセットバックや植栽、軒の出や自然素材にこだわった集落のような土壁削り出しの外壁仕上げ、マウンド形状になった鉄平石乱貼り仕上により、周囲の環境へ好影響を及ぼし、むしろ周囲へ開いているかのような設えとなっている。関西の系譜である細やかな住み手への配慮とともにある、手作業への敬意や原始的なものへ向かう設計は既に関西建築家新人賞の資質を満たしている。今後規模が大きな建築を手掛ける際にもこの姿勢を継続し、より大きな構想へと繋がることを期待している。